1 gravure

365日型活動を展開する

茨城県日立市・塙山学区住みよいまちをつくる会

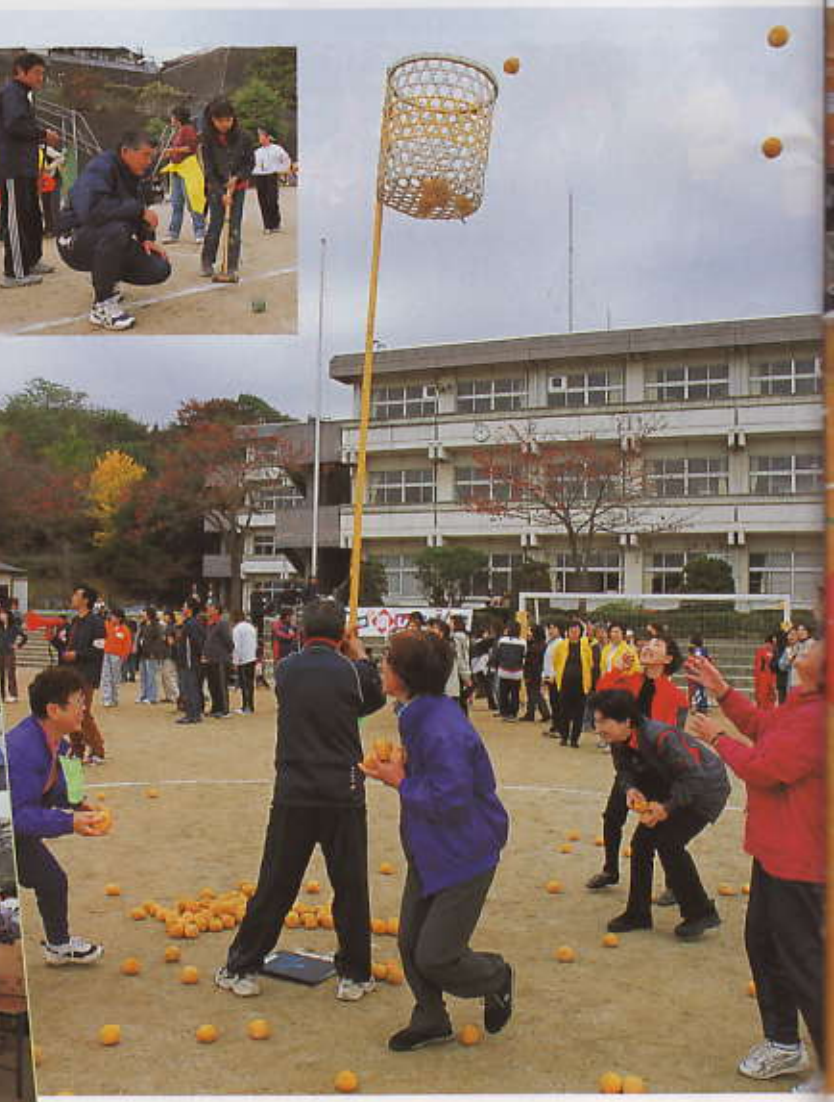
「まちづくりはイベントをやることではない」。こんな発言をきっかけとして、茨城県日立市の塙山学区住みよいまちをつくる会は、これまでのイベントを中心とした活動から生活全般にわたる日常活動に重点をおいた三百六十五日型活動へと舵を切る。平成元年三月のことである。

いま、同会の事務所がある塙山コミュニティセンターの行事予定表には、ほとんど毎日、何らかの行事が書かれている。

そんななかの一つ、平成五年からはじまったのが、「ヤングママ子育て楽集会」。若いお母さんたちが一日中家に閉じこもり、孤独な子育てに悩んでいる。子づれでお母さんたちが息抜きをできる場をつくろうとはじめられた。参加申込を開始すると、応募を希望する人たちで事務所の電話は鳴りっぱなしになったという。年間二十回、三十組ほどの親子が集う。参加者の希望もとりいれ、「のぞましい食習慣を身に付けよう」などの栄養士による講演も開催し、そのかたわら子どもたちが遊んでいる。ときには、室内だけでなく、遠足なども盛り込んでいるという。

高齢者に対する支援メニューも数多い。毎週木曜日はお年寄りの日とし、昼食会やおしゃべり、寝たきり予防のための体操サロンを開催、夕食の配食サービス、八十人を超すふくし員（コミュニティヘルパー）による見守りや支援活動、昨年からはじめた自家用車による高齢者の移送サービス、ふくしかわら版の発行・配布などなどである。配食サービスや木曜サロン、ふくしかわら版配布などには、子どもたちも役割を担い、世代間の交流にもなっている。

「リスタートはなやま」というグループも立ち上げた。六〇歳以上の人の地域社会での生きがいづくりを目的に、料理、史跡めぐりなど趣味活動にいそしむとともに、公園などの清掃や木曜サロンのボランティアも実施。移送サービスはこの人たちも担当する。定年前の五〇代男性には、地域で仲間をつくるための「おとこ塾」が用意されている。さらに里親制度で広げる花いっぱい活動、介護保険の利用率が日本一低いまちをめざしての健康プランの作成や健康サロン、健康フェアの開催。



ゴミ問題では、ステーションの管理のほか、生ゴミ処理機を普及させるために、購入費用の一部を援助している。さらに朝市、防犯・防災、七千五百世帯に月刊で配られる機関紙「かわら版」の発行・配布、単位自治会の運営に対する支援……。と、その活動プログラムは実に多彩。まさにお年寄りから子どもまで、生活全般にわたるメニューを次から次へとあみ出し、実行に移している。

そして数々のイベント。冒頭の発言は決してイベントを否定するものではない。そこは生来のイベント好きの面々。そんな同会がスポーツ少年団と共催で十一月に開催したのが、めちゃめちゃ楽レク大会。「スリッパ飛ばし」、「豆運び」など個人競技、「雑巾がけレース」などの団体競技十四種目に五百人が参加。各種目ごとに厳密に「塙山ルール」を決め、優秀な記録は「塙山ギネス」に掲載される。夏には住民総出で楽しむ「さんさん祭り」が、冬には大人も子どもも出店するフリーマーケット・ゴチャッペ市を開催している。

この豊富な活動を支えるのは、楽集局、未来局、地球局、まつり局、情報局などと名づけられた各部門に所属する二百人を超す同会のメンバー。人数の多さだけでなく、役割分担の徹底さが可能にしているといえるだろう。そして、人材の確保には、活動やイベン

トに参加した人の中から「これは」と思う人を巻き込んでいる。ちなみに、現在、事務局長を努める松崎さんはおとこ塾出身である。

もう一つの秘訣は、会費制。ヤングママでは、一回あたり五百円、めちゃ楽レク大会は二百円、おとこ塾は年会費千円と食材費、木曜サロンでは二百円といった具合に、かならず会費制をとり、受益者負担をつらぬいている。

同会の活動の拠点になるのが、塙山コミュニティセンター。市が建設し、管理運営は同会を中心とする運営委員会が担っている。ここで驚くのは、このセンターのキーを持つ人間が二十五人にものぼるということ。集会所のキーの管理は、どこでもわずらわしい問題。安全性と開放性とのはざ間で苦慮している。「必要だから、そうしている」という同会の西村会長の言葉に地域活動に対する自信がうかがえる。

同会の活動をみて、「まるで小さな役場のよう」と称した人がいる。たしかにそう思える。しかし、大きな違いは、参加者は会費を払い、メンバーは手弁当で、みんな自前のお金で活動していることであろう。

■連絡先
〒316-0015
日立市金沢町2-11-5
塙山コミュニティセンター
http://www.jsdi.or.jp/~hanayama/